IFAO2025印象記

東京大学心臓外科
小野 稔
Minoru ONO

1. はじめに

2025年11月19日から21日にかけて，グランドニッコー東京ベイ舞浜においてIFAO（International Federation for Artificial Organs）2025学術集会を開催させていただいた。IFAOはKolff先生が1977年に設立したISAO（International Society for Artificial Organs）が前身である。2年ごとに人工臓器開発に携わる研究者・臨床家による国際学会を開催し，日本からは1994年に渥美和彦先生，2002年に仁田新一先生が大会長を務められた。2004年から組織名がIFAOとなった。IFAOでは，日本人工臓器学会（JSAO），欧州人工臓器学会（ESAO），米国人工臓器学会（ASAIO）の3極組織から，2年ごとに順番に理事長を選出して，任期の2年目に学術集会を開催する形式となっている。日本からは，2007年に妙中義之先生，2013年に許 俊鋭先生，2019年に澤 芳樹先生が大会長を務められた。

2. 開催に当たって

筆者は今回，IFAOの12人目の理事長兼大会長を務めさせていただいた。国立循環器病研究センター人工臓器部部長である西中知博先生が大会長を務める，「第63回日本人工臓器学会大会」との共同開催で，学会の共通テーマを「Well-being for All－みんなの健康と幸福のために－」とした。これには，両会長のライフワークである植込み型補助人工心臓の安全性に関して最近目を見張る進歩があり，さらにこの質の高い生活を他の人工臓器の分野においても同様に高めていくことによって，「治療を受ける立場（患者，ケアギバー）と治療を施す立場（医師，看護師，臨床工学技士等）が，共に心と体の健康と幸福を目指す出発点となる学術集会にしたい」との思いが込められている。JSAO・ISAO2025告知ポスターは，西中先生とともにかなりこだわって作り上げた。ポスターは，東京をイメージした街並みを背景にして，アニメ化した医療者（医師，看護師，臨床工学技士）と一般の方々 （子どもや学生，お年寄り）が手を携えて高いQOLを目指し，未来に向けて出発していくイメージとして風船が空を舞い上がっている構図とした（**図1**）。

図1　JSAO・ISAO2025告知ポスター

■ 著者連絡先
東京大学心臓外科
（〒113-8655　東京都文京区本郷7-3-1）
E-mail. minoruono61@gmail.com

図2　セッション風景
活発な討論が繰り広げられた。

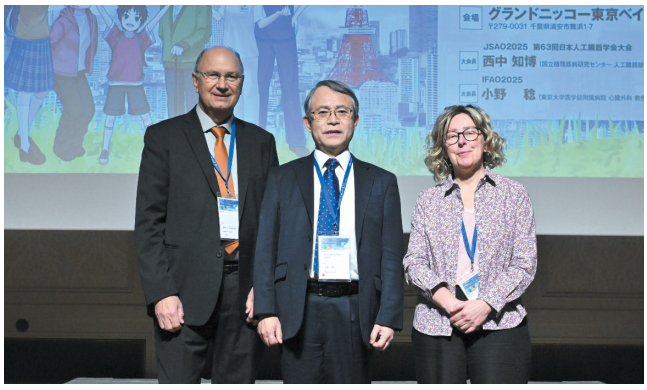

図3　海外からの先生と記念撮影
左からStegmayr先生，筆者，Legallais先生

3.　会期中の会場の様子

IFAOは11月19日午後から21日夕方まで，2日半にわたり第2会場で開催した。19日はJSAO-IFAOシンポジウムを開催して，日米欧の人工臓器のホットトピックの発表が行われた。20日と21日には，4つのシンポジウムと6つの一般口演セッションが繰り広げられた。シンポジウムのテーマは，“Regenerative medicine”，“Basic Research”，“Novel cf-LVADs”，そして“Emerging MCS technologies”であった。中国での新しい左心補助人工心臓（LVAD）の開発から臨床応用のスポード感は早く，BrioVAD（BrioHealth Solutions社）の米国臨床試験の順調な滑り出しや，成人用のBrioVADによる小児を対象にした臨床試験の準備状況，さらには小児に特化したBrioVADの小型化の進捗の発表に参加者一同が興味津々であった。また，HeartCon（TEDA International Cardiovascular Hospital）小児用が5歳の小児に成功裡に装着され，心臓移植へのブリッジとして有効であったという発表にも，大きな驚きが会場を沸かせた。

一般口演セッションでは，海外の演者に交じって日本の若手研究者や医師が積極的に発表に挑戦していたことが印象的であった（**図2**）。IFAOでは毎年，Transcontinental Scholarship（欧州，アジア太平洋，米国の3極の中での異なった地域への研究留学の助成）を若手研究者へ授与している。今回は初めての試みとして，受賞した研究内容の発表をIFAO学術集会で実施して，会場が大いに盛り上がった（**図3**）。

4.　おわりに

学術集会期間は天候に恵まれ，早朝には会場のノテルから富士山をクッキリと望むことができた。IFAO2025は，人工臓器分野の世界の臨床家と研究者が意見を交わす有意義な学術集会であった。

本稿の著者には規定されたCOIはない。